

# 大正期における教師の学びの場の諸相 — 宮城県における童謡教育を中心に —

加藤 理\*

## Various Aspects of Teachers' Learning Places in the Taisho Era: Focus on nursery rhyme education in Miyagi Prefecture

Osamu KATO

**要旨** 科研費JP22K02413の助成を受けた『『赤い鳥』時代の童謡詩人スズキヘキの生涯と活動の全貌の解明』で、大正から昭和にかけて活躍した童謡詩人・児童文化活動家スズキヘキが残した手紙、日記類のデータ化と分析を行うが、本論文はその成果の一部として、宮城県の大正時代の教師たちの学ぶ姿を考察したものである。

スズキヘキは芸術教育と大正自由教育に関心を持つ教師たちとも交流し、ヘキが残した資料の数々から教師たちの日々の活動の様子も明らかとなる。近年、学び続ける教師が求められており、教師が学び続けるための場と環境を整備することは急務だが、その手がかりを歴史に求めることも必要である。そこで本論文は、スズキヘキ資料を中心として、当時の教師たちの学びの場と学ぶ姿に焦点を当てて考察した。大正時代は教育の新しい潮流として児童中心主義と芸術教育を含めたいわゆる大正自由教育が勃興し、意欲的な教師たちは研鑽の場を積極的に求めていた。宮城県でも、宮城県教育会が発行した『宮城教育』誌上での実践報告や教育論争、成城小学校など新しい教育を実践する学校への授業見学など、今日の教師たちの学ぶ姿の原型を垣間見ることができる。

スズキヘキが残した資料から明らかとなる教師たちの学ぶ姿と場から、今日の学び続ける教師の原像を探る。

### はじめに

1918年（大正7）7月に創刊された『赤い鳥』が象徴するように、1910年代後半から1920年代にかけての大正から昭和初期は、童謡や童話などの児童文化活動が華やかだった時代として記憶されている。

この時代は、童謡では北原白秋、野口雨情、西條八十郎、童話では小川未明、坪田壤治、新美南吉らが、『赤い鳥』や『金の船』『童話』『おとぎの世界』などの児童文芸雑誌を舞台に数多くの作

品を残し、児童文化の担い手としての彼らの活動についての研究は深められてきた。

一方で、この時代の教師たちが人的交流を深めながら、童謡や童話の研究を行い、自らの教育実践を豊かにしようと努力していたことにも注目しなければならない。芸術教育を実践しようとした教師たちにとって、童謡・童話を教育活動に取り入れるためにどのような学びを行い、学びの場をどのように求めていたのか知る事は、今日の学び続ける教師を考えていく上でも示唆に富むであろう。

本稿では、宮城県仙台市で1921年（大正10）3

\* かとう おさむ 文教大学教育学部教職課程

月に日本初の童謡専門誌『おてんとさん』を創刊したおてんとさんの人々と共に教師が学びを深めていった様子、そして教師の学びの場として機能していた宮城県教育会雑誌での童謡欄などについて、スズキヘキ<sup>1)</sup>が残したスズキヘキ旧蔵資料から探っていく。

なお、本論文はJSPS科研費JP22K02413の助成を受けた『『赤い鳥』時代の童謡詩人スズキヘキの生涯と活動の全貌の解明』のキックオフとしてまとめるものである。

## 1 教師たちの学びの場としてのおてんとさん社

### 1-1 宮城県内の芸術教育の動きと黒田正

大正時代は、芸術によって精神の陶冶を目指す芸術教育が興隆し、山本鼎『自由画教育』（大正10年）や帝国教育会編『芸術教育の新研究』（大正11年）などの書籍も発行されて全国の教師たちに大きな影響を与えた。

山本鼎、北原白秋、片上伸、岸辺福雄の編集になる『芸術自由教育』（大正10年1月～11月）には、全国各地で自由画展が次々に行われたことが報告されている。宮城県仙台市も全国的な自由画熱の高まりの例外ではなかった。

宮城県で芸術教育の先進的な動きを見せたのは、宮城県で初の児童自由画展を開催した宮城県女子師範学校附属小学校、そして次に児童自由画展を開催した仙台市立木町通小学校である。大正9年から大正15年まで木町通小学校の訓導だった八島炳三は、当時の木町通小学校を次のように回想している<sup>2)</sup>。

私が着任した大正九年から十年ころは、鈴木三重吉の赤い鳥創刊にはじまって、教育界も急に教育の文芸主義傾向が流行して、黒田正先生が受持ちの二年生に試みた童謡集を出版するなどし、またそのころ森谷清一という画伯が自由画を宣伝するなどして、当時木町校は、自由主義的教育の実験学校というようになかった。論議を呼びうわさを生んだ時

代でもありました。

新たな教育の思潮を積極的に推進しようとする熱気が、訓導の黒田正や森谷清一らを中心に木町通小学校に渦巻いていたことがわかる。

自由主義的教育の実験校の様相を呈していた木町通小学校では、1921年（大正10）6月に自由画展を開いている。この時の自由画展について、黒田は次のように報告している<sup>3)</sup>。

私の学校で六月十七日から四日間自由教育の主張に立脚した展覧会—自由画と自由作文、童謡を主とし、書方、自由手工を加へた会を開きました。第一日は父兄の招待日、他の三日間は一般に開放しました。実は三日間で閉会の予定でしたが、団体申し込みが多数の為一日延期したやうな次第です。丁度本県教育総会並に全県下の国語科主任を網羅した国語科研究会が男子師範に開催された際であつた故もありませうが、何しろ当市空前の盛況を呈しました。県市当局は勿論、男女両師範、尚綱女学校等の校長並に主事、各郡視学、中等学校国語教師、教育関係者其他実に六千数百名に達しました。児童は驚喜し、保護者は驚嘆し、一般観覧者は驚異の眼を瞪りました。

自由画は満一ヶ年以上も実地に施した結果で、三室に陳列した約一千点、クレーオンを使用したものも多数を占め、水彩画は七八十点でした。大作もございました。又童謡の展覧会は最も新しい試みで当校児童の最近の創作五十篇を貼付し、一枚毎に挿絵を入れ、他に「童謡の参考書」「著名な童謡作家」「日本最古の童謡」「仙台地方の童謡」等を大書して示し、当校並に「おてんとさん社」の蔵する童謡参考書を出陳、且つ童謡蓄音機レコード（四枚）を使用して大いに宣伝に努めました。ちと宣伝の方が強過ぎたといふ評もあつて恐縮しました。自由作文の方には童話の創

作が注目を引き、書方の方には硬筆書もあり、自由手工には発明創作品の面白いのがありました。

甚だ遅れてしまひましたが、当校展覧会の概況を御報告申上げ、此の機会に先生方の芸術自由教育の御運動に対し敬意を払ひます。

大正十年七月三日 仙台市木町通小学校  
黒田正

木町通小学校が催した展覧会は、黒田の報告がその全貌を伝えている通り、まさに「自由教育の主張に立脚した展覧会」であったことがわかる。自由画のみならず童謡や童話、自由手工など、子どもたちが創作・制作した作品が並べられていたのである。

この報告の中で、「おてんとさん社」が蔵する童謡参考書を出陳したことが記されていることに注目したい。黒田は、大正10年には天江やヘキらのおてんとさん社とのつながりを持ちながら、芸術教育を行っていたのである。

この後黒田は1923年（大正12）に上杉山通小学校に転任する。上杉山通小学校時代では、学校文集『にじ』、『上杉学習新聞』の発行を同僚の伊藤博や安倍宏規らと共に行い、大正自由教育と密接につながる芸術教育実践としての児童文化活動を展開していくことになる。

## 1-2 おてんとさん社と千葉春雄と黒田正

仙台で天江富弥とスズキヘキによって結成されたおてんとさん社は、1920年（大正9）に結成の準備を進め、大正10年1月に第1回童謡研究会を開催して実質的な活動を開始している。

おてんとさん社の活動には多くの教師が参加したことが知られている。童謡教育を中心とした芸術教育を実践し、おてんとさん社の活動にも積極的に加わっていく教師たちは、天江やヘキらとどのようにしてつながったのか。管見の限り、このことを明確に記録した資料は残されていない。だが、残された資料をもとにおてんとさん社と教師

たちの接点をたどっていくことはできる。

天江とヘキによって童謡専門誌を出版することが6月から計画され、その母体としてのおてんとさん社設立に向けた準備が進められていくのは、大正9年の秋である。「おてんとさん社」の名前が最初に確認できるのは、管見の限り大正9年11月18日の消印を持つ、ヘキ宛の天江の手紙である。そこには、次のような文章が記されている。

都築さんの方には、一寸先がけされた様で今の処病わしい様な気まづい様子に見だが、大丈夫まけないでやれると思ふ。

『おてんとさん社』の仕事は金の船のそれあれに対抗して華々しくやらうなどと思つてはいけぬ。どこまでも真面目な親しみのあるものを作らねばならぬ。

東京童謡会の第一回の作品集を見たが、もし見なければ送つてやる。

あまり大した成績ぢやない。

「都築さん」とは『金の船』と東京童謡会を立ち上げ、後に童謡を中心とした文芸誌『とんぼ』を創刊する都築益世のことだが、童謡愛好者たちがお互いの動きを意識していた様子が表れていて興味深い。

文面から判断すると、この時点ではすでに名称が決定していたものの、おてんとさん社としての具体的な活動内容について、まだ固まっていなかったことがわかる。おてんとさん社の名称が決定した後、12月になると天江とヘキの間で活動の構想が固まってくる。大正9年12月12日の消印を持つ天江のヘキ宛葉書には、「『おてんとさん社』の方、童謡会の方、ぜひ三つ四つ作りたいもの」とあり、童謡研究雑誌を発行するだけでなく、様々な活動を構想し始めていたことがわかる。

スズキヘキが残した資料を探っていくと、おてんとさん社と教師たちを結び付けた媒体と考えられるものとして、仙台で発行されていた文芸同人誌『若人』が浮かび上がってくる。スズキヘキは

『若人』同人の一人として大正9年11月号に詩・短歌・俳句を投稿している。そして、同じ号に宮城女子師範学校附属小学校訓導の千葉春雄の評論も掲載されていることに注目したい。

千葉は1921年（大正10）に宮城県教育会が募集した「本県初等教育の現状に鑑み施設実行すべき緊急なる事項」を課題とする論文に一等当選し、この論文が直接の契機となり、この年5月に東京高等師範学校附属小学校国語部訓導に招聘されて上京する。

東京高等師範学校附属小学校には、初等教育研究会が組織されていたが、上京後はその会の機関誌『教育研究』に芸術教育論や童謡・童話、読方教育等について精力的に論文を発表し、国語教育論の主導者としての活躍を見せる。国定教科書批判を行い東京高等師範学校附属小学校を辞職した後は、厚生閣の編集顧問に迎えられ、『教育・国語教育』の編集責任者として綴方教育を推進していく。さらに、東苑書房を設立し、『綴り方倶楽部』などを創刊して作文教育を支える仕事を続け、作文教育の中心的存在となっていく。

千葉とヘキがそれぞれの評論や作品を投稿した『若人』は、1920年（大正9）11月25日に若人詩社から創刊されている。評論、短歌、詩、俳句、短編を掲載し、巻末の「清規」を見ると、「熱烈なる誠意を以つて芸術を賛美せんとする若い人々の自由な集ひ」あるいは、「敬虔な心をもつて芸術に奉仕しようとする若い人々のための自由な結社」を目的としたものであった。

千葉とヘキは二輯から同人になるが、それぞれ創刊号から評論や作品を寄稿している。千葉が寄稿したのは、「芸術民衆化の提唱」（創刊号）、「生活の醇化」（第2巻第2輯）、「生活と芸術を不可分的に成立させる条件」（第2巻第3輯）の評論である。宮城女子師範学校附属小学校で芸術教育を推進した千葉の基部に存在した芸術観や生活観が表白された評論である。日頃の研究と思索の成果を『若人』に発表し、他からの批評を得ることは、千葉にとって得難い学びの場となっていたで

あろう。

千葉春雄の経歴ではあまり知られていないことだが、千葉は『おてんとさん』創刊時の社人の一人として仙羽玻朗のペンネームで名を連ねている。天江やヘキとは出身校も異なり、職業も立場も異なり、交わりがなかった千葉がおてんとさん社に参加するきっかけとなるのは、『若人』誌上に掲載されたおてんとさん社の案内だったと考えられる。

大正9年12月20日に印刷納本された『若人』第2巻第2輯には、おてんとさん社設立に向けて同人を集めていることが、『若人』同人であったヘキによる次のような文章で告知されている<sup>4)</sup>。

八幡町の天江登美草君らと、仙台に、この派の人の結合をつくる運びが動いてゐる。『おてんとさん』といふ小さい雑誌を出してそれで童謡の事を何んでもして行くのだ〔 〕幸ひに、興味をもつ人々の入社を待つ

〔 〕内=引用者

『若人』同人であり芸術教育を推進しようとしていた千葉は、この文章を見ておてんとさん社への参加を決めたのであろう。大正9年の12月下旬に納本された『若人』を見て、すぐに社人になることを決意し、大正10年3月15日に発行された『おてんとさん』創刊号に、7名の創立社人の一人として名を連ねることになったと考えられる。

『おてんとさん』創刊号には、「童謡への注文」という千葉の評論が掲載されている。そこでは、童謡愛好者の集いが仙台に生れることを祝福した上で次のように述べている<sup>5)</sup>。

直接かうした問題と関係のある學校及び家庭の方から問題が起らずに、却而、第三者より改革の火の手が燃え始めるといふことも、如何にもありそうな皮肉で、何ともいへぬ痛快を感じます、同時に教育者なんといふものゝ眞面目が、どこまでが本當なのか、考へて見れば、滑

稽でもあり、大きい悲哀でもあります。

芸術教育に心血を注ごうとしていた千葉が、教師間から芸術教育に関する研究会が誕生しないことに忸怩たる思いを抱いていた様子と、童謡愛好者が集うおてんとさん社のような場での研究を待ち望んでいたことが伝わってくる。

だが、上京することになる千葉がおてんとさん社社人として活動するのは実質的に3ヶ月ほどである。そして、仙台から離れることになる千葉と入れ替わるようにおてんとさん社の活動に深く関わるようになる教師が、『おてんとさん』第2号から社人に加わる仙台市立木町通小学校訓導の黒田正である。

千葉と同様、天江やヘキと接点のなかった黒田におてんとさん社を紹介したのは千葉だったとみてよいだろう。黒田が木町通小学校に在職したのは1915年（大正4）から1923年（大正12）3月の間だが、千葉は大正6年に宮城師範学校女子附属小学校に赴任する以前、1913年（大正2）に宮城師範を卒業して最初に赴任したのが木町通小学校だった。つまり、黒田と千葉は、大正4年と5年の2年の間、木町通小学校で席を共にしたのである。

千葉と黒田が共に在職した2年間は、森谷清一が自由画を推進し、黒田が随意選題の綴り方を推進し、そして千葉が綴り方を中心に自由主義的教育論を展開し、仙台市内における自由主義的教育の実験学校とも見なされる校風を木町通小学校に作り上げた。「新人論客が多く、毎日放課後の職員室は議論百出、賑やかなもの」だったと回想される大正期の木町通小学校において、1890年（明治23）生まれの千葉とその1歳下の黒田のほぼ同年輩の二人は、当時教育界を席卷していた自由主義教育や自由選題の綴り方教育等について、議論を交わしながら影響を与え合い意気投合していったものと思われる。

そして、『若人』を介しておてんとさん社同人となった千葉が、芸術教育や自由主義教育に傾倒

する黒田におてんとさん社の存在を教え、黒田は自身の童謡教育への研鑽を深める場として精力的に活動に関わっていくことになるのである。

### 1-3 おてんとさん社の童謡研究会

黒田正は第2回童謡研究会で初めておてんとさん社の活動に参加する。黒田が参加した第2回童謡研究会は1921年（大正10）2月15日、仙台市東一番丁露月堂本店で開催されている<sup>6)</sup>。その時の記録を『おてんとさん』誌上に報告したヘキは、「新しい熱心な人達を以外に多く加へ得たことが何よりもうれしい」と記している。参加者は天江とヘキの他に刈田仁、桜田はるを、石川善石、蛭子英二、鈴木幸四郎らであった。さらに、「市内木町通小学校から黒田正先生が生徒の作を御持ちになつて参會せられた」とあり、黒田が初めておてんとさん社に登場したことが記されている。この時の参会者は計27名だったが、その中に黒田も含まれていたのである。

黒田は木町通小学校で子どもたちに作らせた童謡を持参していたが、その他にも仙台市立荒町小学校の児童3名の作品も持ち寄られて童謡研究会が進行していく。午後6時から11時まで熱気を帯びた研究会が続けられたが、その中でも「ほうづき」と題した童謡をめぐって激論が交わされる。「ほうづき」は次のような作品である。

ほうづきの紅提灯 どこに  
お祭りあるんだい

参加者の一人鈴木信治はこの作を「童謡のあんまり短詩形なのはリズムカルといふ素因を殺ぐ。くり廻してらうちの一つの調子をもつ位に、はつきりした音楽的要素がなくてはいけないと思ふ」と評し、それに対して天江が「この詩にはリズムがないのか」と聞き、蛭子英二は「子供が胸からうたひ出した言葉はみんな詩だ」と激論になっていく。そして、様々な議論が交わされた後、次のように収斂していく<sup>7)</sup>。

「ほうづき」の作は完全とは言はれなくとも大体に於て、二つの方向から成功してゐる。この普通の形式に列べて二行か三行かの短章を子供におつぱりばなしで與へたい。與へると同時に、子供をほうづき畑につれて行かう。こどもらはお天気のよいそこら一面の赤いほうづきの小提灯を見て大きな喜びをもつ。子供等は與へられた童謡を歌ひ出す。歌ひ出す。くりかへしくりかへして歌ふであらう、私共の小さい日の短い、くりかへして歌ふ歌には、これより字句の不足なのが澤山あつたのに、くりかへして節おもしろくうたつてゐるうちに立派な「子供の節」をこしらへてうたつたものである。そのやうに子供はくりかへしてゐるうちに、立派に作曲する。その自分たちの節の中に、その歌の中に限らない喜びと幸福の心持をやしなつてゐるのだ。

参会者たちの議論の中にいた黒田にとって、教育者たちの子ども観、童謡観とは異なる知見と感性に新鮮な驚きを感じたことは想像に難くない。研究会で得た童謡への知見を黒田は自身の教育実践に反映させていく。

黒田はおてんとさん社のへきと桜田はるをを黒田学級の国語の時間に招き、子どもたちと童謡作りを行うといったこの時代の教育の中ではきわめて大胆な実践も行っている。へきは、木町通小学校黒田学級での体験を回顧しながら、次のように述べている<sup>8)</sup>。

この若い二十一、二と十七、八才のカクオビ少、青年を、子供の童謡教育の綴り方時間の正式の授業に、私と桜田春男を指導教授の名で校長の許可を得て招いた事である。私たち二人は、キモノカクオビ姿で、この木町小の四年の男の子たちと一時間、ニコニコと談り合い、歌い合い、創作し合い批評感想をのべたり楽しく暮した。こんな教室風景がどこにか、もう一度

あるものであるかどうか。

国定教科書での授業を強いられていた時代の中で、木町通小学校が教師の個性を認めながら自由な教育を行っていたことを象徴する逸話である。

黒田が童謡教育を熱心に推進したことも手伝って、その後の黒田学級では、子どもたちが個人で童謡雑誌を作ることが流行する。千葉貴策は『ヒコーキ』、鈴木正一は『夢の国』を作り、旺盛な創作活動を展開していく。さらに彼らは、木町通小学校発行の『コトリ』や『おてんとさん』など、さまざまな童謡誌にも作品を発表していく。

教育実践から得られた知見をまとめた童謡教育論の先駆けとなる『童謡教育の実際』（米本書店）を黒田は1922年（大正11）に上梓する。童謡教育実践の紹介と、童謡の歴史の研究、北原白秋らの童謡作品の分析と考察、子どもたちが童謡を作ることの意義などがまとめられ、教師の研究結果がまとめられた貴重な記録となっている。黒田は『おてんとさん』第2号の編集後記「オテントサンメガネ」に、創刊号を見ての感想を次のように寄せている<sup>9)</sup>。

改正國定読本卷一から卷七まで各卷三四の韻文がありますが何れも

日本中の小學生 八百萬といふ  
八百萬の小學生 四列になつて歩かんか  
八十萬間つづくべし（卷七、第二、長き行列）

といふやうなもので、コドモの感興をひくものではありません。「國定讀本に童謡を採用して欲しい」ことについて書かふと思つてます。

そして、その予告通りに、第6号に「国定読本の童謡と民謡」、第2巻第2号に「国定読本の童謡と民謡—その二」、そして『童謡童話 おてんとさん』第1号に「生活の童謡化」という評論を寄稿している。創作活動の母体としてのおてんとさん社内、黒田は創作の実験を行うと同時に、

教育実践の場から童謡の意義を考えてその見解を  
発表していくのである。

## 2 教育界に形成された童謡教育の学びの場

### 2-1 黒田正と二階堂清壽

黒田が校長の許可で、民間人のヘキと桜田はる  
をを教室に招いたことは、木町通小学校の自由な  
教育環境を象徴するできごとと言える。こうした  
木町通小学校の風土を作り出した一人として、校  
長の二階堂清壽の存在は大きい。在任期間は1920  
年（大正9）5月から翌大正10年7月までのおよ  
そ1年間にすぎないが、この短い間で二階堂は木  
町通小学校の教育に自由主義教育を根づかせて  
いる。

二階堂は、1882年（明治15）に宮城県志田郡三  
本木町に生まれ、1903年（明治36）宮城師範を卒  
業している。卒業後は志田郡三本木小学校訓導を  
振り出しに、仙台市立東二番丁小学校、牡鹿郡蛇  
田小学校、遠田郡田尻小学校、再び東二番丁小学  
校、そして広島高等師範学校附属小学校、2年後  
に再び東二番丁小学校、そして1915年（大正6）  
に仙台市立北五番丁高等小学校長となり、大正9  
年に数え年39歳の若さで仙台市内小学校の中心校  
の一つ木町通小学校長に任じられている。その後  
は宮城県女子師範学校教諭、同附属小学校主事、  
東二番丁小学校長、仙台市視学、学務課長などを  
歴任する。晩年には日本女子体育大学長を勤めた  
他に、1947年（昭和22）に日本女子体育大学附属  
みどり幼稚園を創設し、初代園長として幼児教育  
に精力を注いで94歳の天寿を全うしている。

二階堂は1919年（大正8）2月1日発行の『宮  
城教育』第258号に「自学自修につきて」という  
論文を発表する。これは二階堂が北五番丁小学校  
長になって間もない大正6年4月初めに佐々木主  
事、森田視学、大内市視学が北五番丁小学校を視  
察した際に、「より多く自学自修せしめよ」との  
批評を残していったことに端を発して始められた  
2年間に及ぶ校内各教科研究部での実際的研究の  
報告としてまとめられたものである。

その後、3月1日発行の259号に「自学自修に  
つきて（二）」を発表し、9月1日発行の265号ま  
で、修身、綴り方、算術、書き方の各教科を取上  
げながら計6編の論文が掲載されている。258号  
のみ二階堂の個人名での論文になっていて、それ  
以降は「仙台市北五番丁小学校」名での発表と  
なっているが、文体から見ていずれも二階堂自身  
の執筆によるものと思われる。

主事と視学からの批評に端を発しているとはい  
え、大正自由教育を代表する成城小学校などが推  
し進めた自学自習について、北五番丁小学校が研  
究を深めていったのは、校長である二階堂の熱意  
によるものに他ならない。

二階堂の理想の教育を求め続ける熱意は、1920  
年（大正9）10月25日発行の『宮城教育』第275  
号に掲載された「成城小学校講習会」の報告に顕  
著に表れている。すでに木町通小学校長になって  
いた二階堂は、大正9年10月11日に成城小学校で  
開かれた講習会に自ら参加して研鑽を深めようと  
した。校長になってもなお新しい教育論と実践を  
貪欲に学び取ろうとする二階堂の姿勢は、学び続  
ける教師の姿そのものである。二階堂の報告は、  
次のような文章から始まる<sup>10)</sup>。

現代初等教育界の弊害を一洗しようとして建  
てられた成城学校、校長澤柳博士を初め新しい  
教師の面々、夜を日に次いでの研究、其の余瀝  
になれる講習会、私はどうしても聴かずには居  
られなかつた。

「成城小学校」の校門に立つた時、「会場」と  
黒々と書いた大きな文字を見た時に如何に私の  
心は躍つたでせうか。

「新しい教師の面々、夜を日に次いでの研究」  
への期待とその成果から学ぶことへの胸の高鳴り  
が伝わる文章である。

二階堂が会場に入るとすでに講演が始まってい  
た。講習会は、第一時が柏木訓導の地理と奥野訓  
導の聴き方、第二時が鯉坂主事の修身、第三時が

諸見里訓導の理科と続く。会員研究発表に際して、二階堂は次のように発言する<sup>11)</sup>。

私共が若しも成城学校の訓導を拝命したとしたら何が一番に苦しいだらうか？色々あらうが先づ次の点だらうと思ふ。

「子供がヂットして聴いて呉れない」と云ふ点であらうと思ふ。教師の献立が何時も水泡に帰して万事休焉の状態に陥ることだらうと思ふ。

失礼な申分だが、成城学校の先生方が、若しも野に下られたとしたならばどんな感じを抱かる、だらうか恐らく次の点に一致せらる、だらうと思ふ。

校長や郡視学なんといふものは、至つて下らないものだ、六ヶ敷五條目などばかり並べて窮屈な天地を造つてゐることに嫌焉たらず思はる、であらう。

そして、次のように続ける<sup>12)</sup>。

成城学校には自由な空気が流れてゐるそして児童は野雲雀のように高く歌ふてゐると云ふことに来会諸君は一致した感想を抱かれたであらう。

地方の学校は集团的に形式的に或る拘束圧迫が活いてゐると云ふことは今日否むべからざる現状である。

成城小学校の子どもたちが自由主義教育の中のびのびと活動している様子を「野雲雀」に喩え、国から様々に縛られる地方の公立小学校の現状を「拘束圧迫」とした表現は、仙台市の中心校である木町通小学校の校長という立場を考えるときわめて柔軟かつ大胆な発言と言わざるをえない。

そして二階堂は、自らの教育上の信念について次のように述べている<sup>13)</sup>。

自由も拘束も問題ではない、個性尊重が第一義である、私は其個性尊重を徹底せしむる為め

に「教育的愛」を絶叫せねばならぬ、私は乏しきを小学校長に享けて居るが、職員に向つての唯一の要求は「子供を可愛がつて下さい」の一事である。

個性を尊重し、そのために子どもへの愛を大切にし、子どもへの愛を実現する環境として自由な教育空間を目指したのが二階堂の教育理念だったのである。

校長二階堂自身が成城小学校講習会に参加して得られた知見は、木町通小学校の教師たちに還元され、木町通小学校に最新の教育論をもたらしたものである。二階堂は、学び続ける中で自由主義教育の特長を次のようにとらえていた。①自己活動の促進、②創作的態度、③教師と児童との人格的接触。こうした理念と理想の実現の場として、二階堂校長時代の木町通小学校では、黒田や森谷らによる先進的な自由主義教育が不断の学びの継続を通して様々な形で実践されていったのである。

## 2-2 『宮城教育』の童謡欄と教師たち

宮城県では民間のおてんとさん社が童謡研究団体の先駆けとなり、そこに一部の教員が参加する形で童謡教育の研究がなされていたが、教育界でも童謡研究に力を入れるようになっていく。自らも新しい教育思潮を学ぶことに積極的だった二階堂のような校長が当時の宮城県には存在し、それらの人々が宮城県教育会で重要な位置を占めていたことは、童謡研究をはじめとした新しい教育への模索を積極的に行う土壌の形成を促したものである。

宮城県の教育界が童謡教育に関心を高めた様子は、宮城県教育会が発行した『宮城教育』で知ることができる。1890年（明治23）7月19日に設立認可が許可された宮城県教育会が明治27年9月に創刊した『宮城県教育雑誌』は、1897年（明治30）10月の『宮城県教育会雑誌』への改題を経て、1916年（大正5）に『宮城教育』に改題され

る。第一次世界大戦による好景気に沸いていた大正5年頃には「戦後教育号」や「行啓記念号」、「運動会号」など増ページの記念号を次々と出していた。だが、第一次世界大戦後の不況によって県の財政が深刻になると、宮城県教育会に対する県の助成が困難となり、1921年（大正10）10月に発行した280号をもって休刊を余儀なくされる。財政上の理由で活動が停滞していた宮城県教育会だったが、1922年（大正11）10月30日の学制発布50年を記念して『宮城教育』の復刊計画が持ちあがり、大正11年11月10日に復刊されて『宮城教育』第281号を発行する。

こうした経過をたどった『宮城教育』だが、復刊号を出すにあたって宮城県視学の利根川準七郎、萱場柔壽郎、宮城県女子師範学校校長栗田茂治、第二高等女学校校長秋葉馬治、宮城県女子師範学校附属小学校主事二階堂清壽、仙台市立立町小学校長戸田一男ら編集委員一四名が新たに選出されている。いずれも宮城県教育界の重鎮たちだが、その中に、一訓導である黒田正も含まれていることに注目したい。

黒田の仕事は、原稿を集めたり企画を立てたりという編集実務を担うことだったものと思われる。黒田は大正11年10月22日付けでズキヘキに宛てた手紙の中で、『宮城教育』について次のように言及している。

宮城教育の方は、復活第一号分は南材校（△二十篇ばかりの中から五篇を選びました。）と木町校各五篇宛外に童話一篇としましたが、第二号分は郡部五、六校へ投稿依頼しましたから、少しは集まらうかと思ひます。（二十七日メ切としました）

三号からは大丈夫だらうと考へます。研究文として「童謡の研究」と題し、（1）童謡勃興の所以、と（2）童謡の価値、とを載せる筈です。

この手紙から、復活号の『宮城教育』に掲載した子どもの童謡と童話は黒田が集めて選定したも

のであることがわかる。

復刊された『宮城教育』第281号には、子どもの童謡の他に、童謡と童謡教育に関する論考として戸田一男「童謡教授観」、黒田正「童謡の研究」も掲載されている。『宮城教育』は県内の教師たちに広く読まれた雑誌である。そこに童謡教育と童謡の研究報告が掲載された意味は大きい。

小電子のペンネームで書かれた仙台市立立町小学校校長戸田による「童謡教授観」には、「『宮城教育』の復興に際して、教育會の理事者が、新に童謡欄を設け、編輯擔當者に黒田君を挙げられたのは確に其の人を得たものである」と、『宮城教育』に童謡欄が設けられた経緯を述べている<sup>14)</sup>。宮城県以外の各県教育会でも、『信濃教育』『茨城教育』のように、各県教育会が機関誌を発行しているが、童謡教育や童謡論を宮城県のように取り上げている県は珍しい。

戸田は「童謡教授観」の中で、高等1年の男子に童謡教育を行っている様子を参観したことに触れ、高等1年男子の作品が「尋常三四年程度の、子供らしい地口であつた」ことに疑問を感じたことを述べている。そして、「童謡とは元来どんなものであらうか。綴方研究者が數週間にわたつて指導だか何だかを試みねばならぬ程に興味のあるものだらうか。さういふ興味を惹き起こすべき特色は童謡のどこに存するだらうか。高等科の児童が乾からびかけた幼少時の経験を回想して、地口式の所謂童謡をものしたところで、生の伸長とかいふことに何程の貢献をなすであらうか」と疑問を吐露し、次のように童謡教育について見解を述べている<sup>15)</sup>。

綴方に於て童謡を取扱ふのは、うたふべきものを書いたものにするところに無理がある[.] 多くの場合教師の指導は、児童心理の琴線に觸れないで、修辭の末になづんでゐる。よし其の方法は、分解よりは総合、説明よりは味解、批判よりは鑑賞、理智よりは直覺といふ態度に出るとしたところで、児童の受けるところのもの

は修辞めいたところのみではないだろうか。これを児童の作品に徹すれば、十中八九、時としては十中の十まで、出まかせの地口か、教師の推賞したと思はれる一二句をとんでもないところにつかつかつた鶴的のものではないだろうか。綴方としての童謡指導には、此の幣のつきまとふことを免れ得ないやうに私は感じる。寧ろ童謡唱歌をさかんにやつて児童心理の琴線に共鳴を感じさせ、児童の感情生活を培ひ、児童の詩境を開拓し、而して後、折にふれ、時にのぞんで童謡綴方を課するといふ行方が正しいものではないかと思はれる。 [.] = 引用者

こうした戸田の見解に対して、戸田が見学した高等科での童謡教育を担当していた黒田正は、「宮城教育復活第一號に於いて小電子氏から童謡教授の御批評をいただいたのは私で御座います」と書き出して「小電子氏に」と題して戸田の「童謡教授観」への批評と反論を掲載している。

黒田は、「氏はその結果から見て尋常三、四年程度の低級なもので生の伸長とか言ふことに何等の貢献もしないであらうとの御心配ですが私は決してさうではないと思つて居ります」と述べ、「童謡は子供の純真なる感情生活が子供自身の言語を以て発表（書くこと、讀むこと、歌ふことを含めて）したものであると思ひます」として次のように反論していく。

氏は童謡は謡ふ所にのみ生命はあると申して居られますが、成程童謡は謡ですから歌ふべきものに相違はないのですが、しかし童謡は書き、それを讀んで味ふてみて相當に子供の感情生活が現れて居り、面白さがあるものであればよい、そして謡ふにしたところで自分自身の思ふ通りの節をつけて心の中でうなづきながら謡ふても十分童謡であると言ひ得るものであると思ふのです。

要するに聲をはりあげて謡ふところのみ童謡の生命があるとは決して思はれません。

この童謡論には、おてんとさん社第二回童謡研究会で「ほうづき」をめぐって交わし合った激論やスズキヘキらとの交流の中で得られた童謡論が反映されている。

おてんとさん社での童謡をめぐる議論に大きな影響を与えていたスズキヘキは、「原始童謡主張」という独自の童謡論を唱えている。「原始童謡主張」では、子どもが持つ残酷さも含めて子どもの生活から生まれる感情や感覚、心の揺れ動きをありのままに認めながら、それらを「童謡」という文学として表現することを追求することを求めていく。そして、その中に、子どもを超えて人間という存在が本来持っている感情や感覚を見出そうとし、そうした感情や感覚、心の揺れ動きを芸術として表現することで人間の本性を取り戻していこうとする。ヘキはまた、自身の童謡を語りながら自然に節をつけて歌っていた。こうしたヘキの童謡論と黒田の童謡論を照らし合わせると、黒田の童謡論と童謡教育論が、おてんとさん社の研究活動の中で鍛えられていったものであることが感じられる。

『宮城教育』誌上での二人の論戦は、この雑誌の読者である多くの教員たちを刺戟し、多くの教員にとって童謡教育の学びの場となり、様々な知見や発見をもたらしていったと考えられる。この後『宮城教育』は、子どもたちの童謡作品を掲載するほかに、童謡や童話を取り上げながら、芸術教育についての論考を意欲的に取り上げ、教師たちに学びの場を提供していく。

『宮城教育』誌上での童謡論と童謡教育論を主導していったのは、編集委員でもあった黒田正だが、童謡研究欄は次第に様々な教員たちの童謡論、童謡教育論で埋められるようになっていく。一例を挙げると、291号に鈴木貫一「家庭と幼年の童謡」、292号に鈴木徳市「童謡の概念について」、294号に加藤金三郎「子供の作品から見た童謡」などである。宮城県の教育界で童謡教育論が活発に展開され、教師たちの実践が豊かに展開されていくのである。

### 2-3 『宮城教育』誌上で展開された議論

『宮城教育』が教員たちの学びの場となり、議論を活性化させた様子は、学校劇・児童劇に関する議論が誌上で沸騰したことからも明らかとなる。

学校劇に関しての画期的な出来事は、1924年（大正13）8月7日に岡田良平文部大臣が学校劇禁止に関する訓示を地方長官会議で出し、9月3日に文部次官通牒が直轄学校長に出されたことである。通牒は「学校生徒ニシテ演劇の行動ヲ為ス者ノ取締ニ関シテハ、明治四十二年本省ヨリ訓示ヲ発セラレ、尚過日地方長官会議ニ際シテモ、特ニ本省大臣ヨリ訓示ノ次第モ有之タル処、語学練習等ニ於テ脂粉ヲ施シ、仮装ヲ為シ、演劇興行ニ近キ行ク為スモノ有之趣、此ノ如キハ固ヨリ訓令ノ精神ニ照シ不可思議ニツキ、而今貴校ニ於テモ十分御監督ノ上万事遺憾ナキヲ期セラレ度、依而此段通牒ス」という内容であった。

この訓示と通牒が、自由主義的教育の風潮の中で、芸術教育を進めようとしていた学校現場に与えた影響は大きかった。雑誌や新聞でも大きく取り上げ、『芸術教育』10月号が「学校劇は質実剛健の氣風に反するか」と題した特集をしたり、『帝国教育』11月号には訓示を含む文部行政を批判した記事が掲載されたりした。

様々な芸術教育論を展開していた『宮城教育』では、岡田文部大臣の訓示に先駆けて、285号（大正12年3月）に女子師範学校附属小学校訓導本郷兵一が瓢逸子のペンネームで「学校劇を論議する迄」を書いて学校劇へも関心を高めていた。岡田文部大臣の訓示と通牒が出されると、306号（大正13年12月）で「学校劇及学校舞踏に就ての意見」という11ページに及ぶ特集を組んでいる。そこには、伊丹モトヨ「学校劇に就ての想片」、二階堂清壽「学校劇に就て」、戸田一男「学校劇に就て」、後藤才治「されど星はのぼりぬ」など、7名の論文が記載されている。

8月11日の読売新聞では「又も児童劇を壓迫するとは言語道断の文相だ」の見出しで、巖谷小波による「芸術を解せぬ舊思想の行り方だ」と批判

した見解と、「私は文相の訓示は當然の事と思ふ」という坪内逍遙との対立する見解を載せている。「言語道断」という読売の見出しに見られるように、世間の受け止め方は強権的な弾圧と捉える批判的風潮が強かった。

だが、『宮城教育』では、「学校劇に對する岡田文相の態度は諒とすべきものである。文相のいふところは之れを要するに邪道にふみこんだ学校劇を沮してその正道にかへらしめ、本然の面目を保たせようとの警告」<sup>16)</sup> だとする戸田の見解や、「学校劇の墮落や脱線が過般の訓示と痛棒を感じしめるので、痛いのは他にあるのではなくて自己の傷痕なのだ。吾人は先づ此の傷痕を癒すべきであると思ふ」<sup>17)</sup> とする二階堂の見解、「藝術の眞意を解せず只々世のさわぎに乗じる体の者はなかつたか。その表出の方法に於ても徒らに非教育的な児童の玩弄視に陥る等の事はなかつたか」<sup>18)</sup> とする後藤の見解など、社会の過剰な反応に惑わされることなく、教育現場に立つ教育者の冷静な視線から得られた理智的な見解が述べられている。学校劇そのものの禁止というよりは、子どもたちの行き過ぎた「脂粉」と「仮装」に対する注意喚起であり、芸術教育の本旨を見直す機会にすべきだ、という論調が展開されたのである。

以上の例に見られるように、宮城県教育界を代表する論客や、日々子どもたちの教育に携わる訓導達による教育論が掲載された『宮城教育』は、教師たちの学びの場としての機能を果たし、多くの教師たちに最新の教育論や教育課題について考え、学ぶ機会を提供していたのである。

### おわりに

ここまで、宮城県内における教師たちの童謡教育の学びの場として、おてんとさん社の童謡研究会と『宮城教育』を取り上げて論じた。この他に、童謡教育の学びの場として機能していたものに、1923年（大正12）4月から始まる仙台児童倶楽部がある。仙台児童倶楽部設立の経緯やそこでの活動については拙著『「児童文化」の誕生と

展開一大正自由教育時代の子どもたちの生活と文化』(2015年、港の人)で詳述しているので本稿では触れないが、毎月宮城県図書館で開催される童謡童話会の後、関わった多くの教師たちによって演じた童話や童謡についての合評会が開かれ、厳しい指摘をし合いながら学び合いを行っていた様子が資料に残されている。詳細については拙著を参照していただきたい。

童謡教育が盛んな時代の中で、童謡と童謡教育に関する研究会が教師たちの間から起らず、おてんとさん社のような童謡愛好者たちの中から立ち上がったことに対して、「教育者なんといふもの、真面目が、どこまでが本當なのか、考へて見れば、滑稽でもあり、大きい悲哀でもあります」と慨嘆した千葉春雄の言葉は、様々な教育課題に直面し、学び続けることが求められている現在の教師たちにどのように響くだろうか。

本稿ではスズキヘキ旧蔵資料を手掛かりに、童謡教育をめぐる教師たちの学びの場について確認してきた。スズキヘキ旧蔵資料の研究から得られるこの他の知見については別稿を期したい。

## 【註】

- 1) スズキヘキ(本名鈴木栄吉 1899-1973)は山形県新庄市で生れ、仙台市北目町で少年期を過ごした詩人。天江富弥(本名天江富蔵 1899-1984)と共におてんとさん社を作り、日本初の童謡専門誌『おてんとさん』を発行する。生涯で1000以上の詩や童謡を残し、日曜学校や林間学校などでの児童文化活動にも深く関わりながら、仙台市を中心とした児童文化活動に生涯を通して関わる。
- 2) 『培根』仙台市立木町通小学校、1974年、66～67ページ
- 3) 『芸術自由教育』第1巻第八号、1921年8月1日、アルス 56ページ
- 4) 『若人』第2巻第2号 1921年1月、若人詩社 62ページ
- 5) 『おてんとさん』創刊号 1921年3月、おて

んとさん社 7ページ

- 6) 『おてんとさん』第2号 1921年5月、おてんとさん社 48ページ
- 7) 『おてんとさん』第2号 49ページ
- 8) スズキヘキ「仙台童文学の人人(12)―黒田正」『ポランの広場』第16号、1971年11月、3ページ
- 9) 『おてんとさん』第2号 55ページ
- 10) 『宮城教育』第275号 1920年10月 宮城県教育会 43ページ
- 11) 『宮城教育』第275号 45ページ
- 12) 『宮城教育』第275号 45～46ページ
- 13) 『宮城教育』第275号 48ページ
- 14) 『宮城教育』第281号 1922年11月 宮城県教育会 17ページ
- 15) 『宮城教育』第281号 18ページ
- 16) 『宮城教育』第306号 1924年12月 宮城県教育会 68ページ
- 17) 『宮城教育』第306号 67ページ
- 18) 『宮城教育』第306号 71ページ